地域社会に暮らす長期定住外国人の日本語使用実態
－発話データを通して－

佐　野　香　織

要　約

本稿は、約８年の日本定住後日本語母語話者とコミュニケーションを取る機会を持ち始めた長期定住ブラジル人を対象者に行った調査報告の１部である。初期の名詞使用の重要性や、調査対象者は思い通りにトピックを語ることが出来ず聞き手にトピックについての発話理解のほとんどを委ねている点が指摘された。

【キーワード】

地域に暮らす外国人、　複合的な支援、　言語使用実態、　名詞使用、　モノローグ発話困難

１．はじめに

本稿は、博士論文の研究背景を述べ、調査研究結果の一部を報告するものである。

近年、経済活動のグローバル化、少子高齢化に伴う労働力不足補完等の理由から日本に滞在・定住する外国人数は増加の一途を辿っている。現在、「多文化共生」へ向けた様々な取り組み、支援、日本語教育が行われているが、これらの取り組みに全くアクセスできない環境にある、もしくはアクセスしない外国人が圧倒的に多く、日本社会に直接参入し、それぞれの環境の中で日本語を身に付けていくケースが大勢を占めると思われる。そして、滞在が長期化するにつれ、様々な問題を抱えるようになるのが現状であるといえる。

日本社会が多言語・多文化社会に移行しつつある今、上記のような長期定住外国人も重要な役割を果たしていく社会の一員であるが、彼らの求めるニーズ・どのように日本語を身に付けてきたかという言語使用の実態は分かっておらず、今後明らかしていくことが必要である。支援活動も、この点が不透明なまま、試行錯誤のうちに行われているのが実状である。

長期定住者が耳から覚えた日常会話以上の新たな学びを求めていることなどニーズの多様化が指摘されており、このニーズにこたえるべく試行錯誤が行われている。しかし、長期定住外国人が長年の日本語を使用を通してどのような点に困難を感じているのか、といった基本的な事実すら把握できていないのが実状である。地域に暮らす長期定住外国人の支援活動を考えるには、言語の専門家による研究だけではなく、幅広く様々な人々のネットワークによる複合的な支援活動が必要であることが指摘されているが（西尾2003)、言語的側面からの研究は多いとはいえない（佐野2007)。言語的側面から、長期定住外国人の視点に立ち、まずその使用実態を知ることも必要である。

２．先行研究

言語的側面からの先行研究として、まず海外・日本国内における定住外国人の第２言語（Ｌ２）習得研究での言語使用に関する知見を簡単に概観し、次に日本語を対象としたＬ２習得研究の知見をあわせて見ていく。

ヨーロッパにおける定住外国人のＬ２研究では、データの縦断的な観察によって、目標言語における普遍的な発達段階を示している。ESFプロジェクトはヨーロッパの移民を対象とした第２言語習得研究プロジェクトである。Ｌ２に関わる要因、構造などがテーマになっているが、そのうちの一つとして、成人移民の第２言語発話発達段階をあげている（Klein & Perdue 1992)。まず、簡潔で接続のない名詞並列を中心とした名詞句発話を中心とする段階である、名詞句構造（Nominal utterance organization）が見られる。次に、動詞の出現による構成力が見られる不定動詞構造（Infinite utterance organization）が見られるようになるという。Klein&Perdue（1992）では、名詞を中心とした使用であるNUOをPre-Basic variety、動詞使用が見られるIUOをBasic varietyと段階づけ、成人自然習得者の発話特徴における体系としている。そして、IUOの発話構造で、日常生活におけるコミュニケーション場面では事足りてしまうため、このBasic variety段階で化石化してしまうという。

日本語を対象とした研究においても、就労を目的として滞在する外国人のプロジェクト（土岐1998）で縦断的に研究がなされており、レベルの低い対象者は

動詞使用が少なく名詞を多用するという指摘（谷口1998）や、時間概念習得において動詞をほとんど使用しない対象者についての報告（平高・稲葉1998）がある。就労を目的としたブラジル人の動詞習得において、ナカミズ（1997）でも同様の指摘があるが、何れの研究においても、詳細は明らかではない。

３．研究目的

筆者は地域に暮らす長期定住外国人と彼らの母語で話をする際によく聞いた悩みとして、「会話の中で『(テレビを）見る』『(映画を）見る』のような『何かをする』ということを言いたいけれど、言えない」ということがあった。動詞に当たる言葉を使用して表現できず、日本での日常生活に支障はないが、いつまでたっても自分のことを思い通りにモノローグで語れないということである。

こうした地域に暮らす外国人が実際に感じている困難と先行研究を踏まえ、まず初期の段階での名詞と動詞について詳細を記述し明らかにすることを目的として、長期定住ではあるが日本社会・地域との関わりがほとんどなかった外国人を対象に調査を行った。

４．調査概要

４．１ 調査対象者

対象者は日系の夫・家族と共に来日した、日本社会・日本語話者との接触経験が少なく、コミュニケーションに困難を感じているブラジル人１名（20代：女性）である。母語はポルトガル語、家族は、夫・子供２人（９歳・３歳)、祖母（日系２世）で、夫は日系３世だが日本語はほとんど話せない。対象者は日系人ではなく、家族内の会話はポルトガル語で行われている。1996年に就労を目的として来日し、滞日約８年(一時帰国を除く合計年数:調査当時）である。職場ではブラジル人数人と共に働いており、日本語話者との会話は朝礼や休み時間に交わす挨拶程度であるということである。体系的な日本語学習の経験もなく、今まで定期的に日本人と日本語で会話をかわす機会も持っていなかった。居住地域は東京近郊Ａ市でブラジル人集住地域ではなく、都心地域のベッドタウンと呼ばれる新興住宅地である。

４．２ 調査収集データと分析

調査データは、対象者が定期的に支援活動に参加し始めた2004年９月のデータである。東京近郊Ａ市の外国人支援活動において、活動の中心である日本語を母語とする支援活動参加者（以下支援者とする）との自由なトピックによる１対１での「おしゃべり」[1]を録音・文字化した資料をデータとした（43分間)。この日のトピックは、最近の出来事であった。筆者は、支援活動参加者の一人としてその場におり、会話の流れ、発話意図が分かる程度の距離に常に位置し、会話の理解に必要な文脈はメモを取った。分析には、日本語から単語の頻度統計情報を作成するソフト、KHCoder[2]を用いた。

５．調査結果と考察

５．１ 名詞・動詞使用

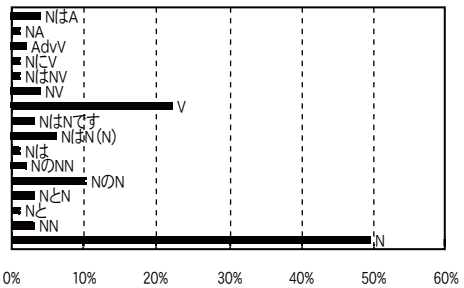
名詞の使用が圧倒的に多く（105回)、動詞は頻度・異なり語ともに少ないことが分かる。助詞の使用は、「は」の使用が最も多く、次には「の」「と」など名詞をつなぐ助詞の使用が続く。また、「で」「を」など動詞と関わる助詞の使用頻度は見られず、唯一「に」の使用が１回見られた。「ね」の使用については、「～です」もしくは無標識で名詞文とする箇所に「C（子供の名前）ね」というように名詞に「ね」を直接使用することが見られている（表１)。

表１　品詞別使用頻度

名詞	動詞	助詞	形容詞	副詞	疑問詞
105	31	42	26	3	6

更に詳細を見ると、名詞のみで用いるいわゆる名詞一語文での使用が最も多く、続いて「名詞＋は」「名詞＋の＋名詞」「名詞＋と＋名詞」のような、助詞を伴った形式が多く見られる（表２)。使用のほとんどを、名詞文使用が占めており、動詞文の使用は非常に少ないことが分かる。動詞を見ると、動詞１語のみでの発話が最も多く見られるが、これらは「分かんない」「違う」というような定型表現での使用であり、述語文での動詞使用は非常に少ないといえる。

表２　調査対象者の名詞･動詞使用



６．総合考察

調査対象者は伝えたいことを名詞１語、もしくは名詞句全体に託して表現しており、聞き手に発話理解のほとんどを委ねていることが考えられる。動詞を述語として「トピックについてモノローグで語る」ことは少ない。前述の長期定住者が困難を感じている点が浮き彫りになった形である。

この結果は、Ｌ１の言語発達において、トピックを聞き手に示すことで理解をはかる「指し言語」から、そのトピックについて話すことができる「語り言語」への流れを示したReed（1996）の主張や、Givón（1985、1995）のトピック-コメントの構造の発話が表れる「語用論モード」（pragmatic mode）から主語-述語構造が表れる「統語的モード」（syntactic mode）に移行するという主張にも一致するものである。本調査結果ではこれら２つの主張をあわせ、名詞・名詞句使用の段階の重要性が指摘できたといえる。

７．まとめと今後の課題

本研究は、約８年の日本滞在後、日本語母語話者とのコミュニケーションを取る機会を持ち始めた調査対象者の初期調査事例報告である。コミュニケーションは名詞中心で行っていることから初期の名詞使用の重要性や、聞き手にトピックについての理解を委ね自らコメントを語るということをしていないことが分かった。しかしながらこの結果は一般化できないことはいうまでもなく、今後どのようなプロセスを経るのかを明らかにする縦断調査や、他の同様の定住者について調査する必要があるといえよう。また、「強い動機づけ」とはどのようなものなのか、調査対象者の背景や取り巻く環境についての調査も今後必要であると思われる。

注

１．この支援グループの活動の中心は同じ地域に住む者同士の“おしゃべり”であり、“日本語を教える”ための会話ではなかった。

２．KHCoderは大阪大学の樋口耕一氏が作成した分析ソフトで、茶筌（chasen）を用いて出現する形態素情報の頻度統計解析を可能にするものである。
http://khc.sourceforge.net/

参照文献

平高史也・稲葉圭子（1998）「外国人就労者における時間概念の習得について」『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』平成６-８年度科学研究費補助金　代表者：土岐哲 41-67.

ナカミズ エレン（1997）「日本語におけるスタイル切り替えの習得段階 ブラジル人就労者の例―」『阪大日本語研究』９号、83-110.

尾崎明人（1999）「就労ブラジル人の発話に見られる助詞の縦断的研究（その１）終助詞『ね』を中心として」『名古屋大学日本語・日本文化論集』７、791-107.

佐野香織（2007）「参照点能力とL２言語習得　－長期定住外国人と日本語母語話者との会話データを通して－」認知言語学論集第７巻 日本認知言語学会、23-31」.

谷口すみ子（1998）「絵の説明タスクの分析結果」『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』平成６-８年度科学研究費補助金　代表者：土岐哲　23-31.

土岐哲（1998）『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』平成６-８年度科学研究費補助金

西尾珪子（2003）「日本語支援とは何か」『現代のエスプリ』432、マルチカルチャリズム　至文堂 38-48.

Givón,T.(1985) Function,structure,and Language Acquisition, In Slobin, D.(eds), *The crosslinguistic study of language acquisition Vol.2:Theoretical issues*, Lawrence Erlbaum.

Givón,T.(1995) *Functionalism and Grammar*. John Benjamins, Amsterdam.

Klein,W.& Perdue,C.（1992）*Utterance Structure*, John Benjamins, Amsterdam.

Reed,E.S.(1996) *Encountering the World:Toward an Ecological Psychology*. Oxford, Oxford University Press.（細田直哉(訳) 佐々木正人(監修)（2000）「アフォーダンスの心理学 生態心理学への道」新曜社)

さの　かおり／お茶の水女子大学大学院　応用日本言語論講座